

# ハルビンと北京をめぐる巡検：2018年度立正大学地理学科 「海外調査法およびフィールドワーク」の実践報告

横山 貴史\*・山下 清海\*

[キーワード] 1 ハルビン 2 北京 3 旧満洲 4 中国 5 巡検

## I はじめに

本稿は、2018年8月19日から28日にかけて10日間実施した立正大学地球環境科学部地理学科の開設科目「海外調査法およびフィールドワーク1」の実践報告である。同科目は2008年度より開講しており、初回はアメリカ合衆国ワシントン州、2009年度は台湾、2010年度は南ドイツ・北イタリア、2012年度はニュージーランド、2013年度はフィンランド、2015年度はアメリカ合衆国ワシントン州、2016年度はスイスと様々な地域で行われてきた。2018年度は筆者らが引率教員となり、中華人民共和国（以下、中国）黒竜江省ハルビン市および北京市を対象地域とした。

多くの地理学系の学部・学科では、巡検や現地調査（以下、巡検）を重視しているが、海外での巡検を開講していることも少なくない（例えば内田・池田、2011；兼子・呉羽、2015）。学生を連れて海外において巡検を実施する場合は、旅費などの経済面はもとより健康面・治安面などにおける懸念も大きく、実施への障壁は大きい。しかし、大学生の時期に目的意識をもった巡検を海外で行うことは、教育効果の面でも大きいものがある。

以下では、IIで巡検の企画について、IIIで現地にて撮影した写真を交えながら巡検の行程を整理し、IVで実際に参加した学生の反応について紙面の許す範囲で述べ、まとめたい。

## II 巡検の企画概要

本巡検の主なねらいは、中国の首都北京市および旧満洲の主要都市であった黒竜江省ハルビン市におけるフィールドワークを通して、日中間の現代史を現地でも確認し、現代中国の発展と課題を体験的・総合的に理解することであった。ハルビン市は、黒竜江（アムール川）にそそぐ松花江が東西を流れている。19世紀の終わりより帝政ロシアによる東清鉄道建設の拠点となった。20世紀に入り満洲国の支配下に入ると、多くの日本人の流入が起こり、旧満洲の中心地として発展を遂げてきた。こうした経緯から、それぞれの時代区分ごとに形成されてきた歴史的な景観が残っており、巡検の対象地としては好適である。

2017年12月から募集を開始し、2018年4月に受講生を決定し、そこから月1度程度の事前指導を行った。また、事前に担当者が設定したテーマについて受講生は事前学習を行い、資料集を作成した。

詳細は後述するが、巡検では全10日の行程のうち、移動日の2日間を除き4日間はハルビン市および周辺地域、4日間は北京市に滞在した。さらに、それぞれ1日ずつ自由行動のグループ調査（4名×2グループ）を行うこととした。

参加者は立正大学地球環境科学部地理学科の2年生2名、3年生5名、4年生1名の計8名であった。

\* 立正大学

ホテル・バス・現地ガイドなどは日本の旅行会社に手配をし、成田空港に集合後、現地でガイドと合流した。予算は1名につき約16万円（航空券・ホテル・現地ガイド・バス・3日分の夕食）であり、自由行動時の食費など個人負担を含めても約20万円の経費で実施することができた。

### Ⅲ 巡検の行程

図1は、本巡検の主な訪問先である。以下に述べる行程の詳細と合わせて参照されたい。

#### 〈1日目：2018年8月19日〉

成田空港に現地集合した後、北京空港を経由してハルビンへ移動する予定であった。しかし、乗り継ぎでトラブルが発生したため、翌朝の振り替え便まで待機することとなった。

#### 〈2日目：2018年8月20日〉

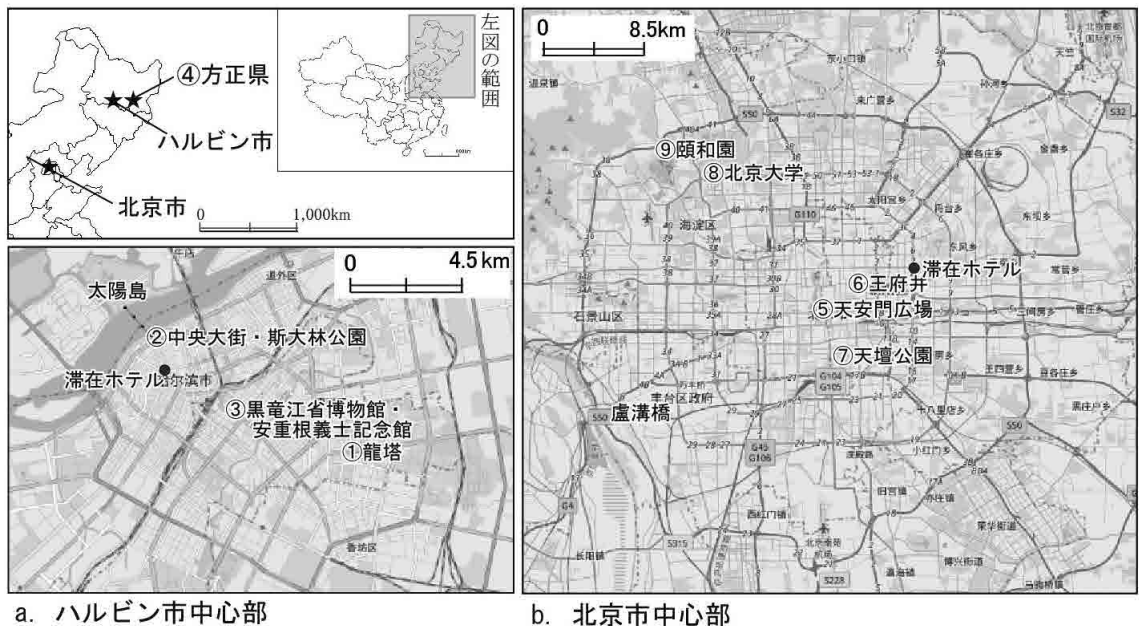
無事ハルビン市に到着し、巡検を開始した。ハルビン市での滞在先となるホテルはハルビン市中心部

の道里区に所在していた。このホテルから北の松花江に向かって真っすぐ中央大街が伸びており、立地はとてもよかった（第1図）。

この日はまず、ハルビン市南岗区にある龍塔①を訪問した。龍塔はテレビ塔であり、地上186mからハルビン市の景観を望むことができる。天気もよく、高層マンションの建設ラッシュの様子やハルビン市中心部における都市の広がりについて把握することができた（写真1）。その後、ホテルに戻り、中央大街およびス大林（スターリン）公園②を散策した。中央大街は、帝政ロシア時代には「キタイスカヤ」と呼ばれた中国人街であり、南北に約1.5km続く目抜き通りに沿う繁華街である。曜日に関係なく多くの観光客を集めており、ロシア系の土産物店や飲食店が並ぶなど、エキゾチックな雰囲気をもっている（写真2）。夕食は各自自由とした。

#### 〈3日目：2018年8月21日〉

朝9時にホテル前に集合し、まず第二次世界大戦中、日本軍の研究機関であった七三一部隊について



第1図 ハルビン市および北京市中心部

資料：OpenStreetmap を用いて筆者作成。© OpenStreetMap contributors



写真1 龍塔からの眺め

ハルビン市南崗区にある龍塔（テレビ塔）から南東を望む。手前に見える緑地はゴルフ場である。

（2018年8月，横山撮影）



写真2 中央大街の景観

中央大街には、帝政ロシア時代や旧満洲国時代のモダンな建物が現存し、特徴的な景観である。

（2018年8月，横山撮影）



写真3 旧七三一部隊のボイラー施設

旧七三一部隊の施設には、往時の建物が廃墟となって残っている。

（2018年8月，横山撮影）



写真4 昼食の様子

ハルビン市では、東北料理がよく供された。東北料理は、寒い地方ならではの味付けの濃い料理で、野菜や肉の炒めが中心のシンプルな料理である。

（2018年8月，横山撮影）

の記録を展示する「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」を訪問した。同館はハルビン市中心部より南へ車で約40分ほどの平房区に位置する。かつて同部隊の施設があった場所にあり、ボイラー施設など往時を感じることができる施設が現存している（写真3）。中国東北料理の昼食をとった後（写真4）、午後からは、黒竜江省博物館と安重根義士記念館③を訪問した。黒竜江省の位置する中国東北部の自然条件やハルビン市の歴史的経緯について理解を深めるとともに、日本ではハルビン駅で伊藤博文を暗殺し

た人物として知られる安重根（アン ジュンゲン）について、その思想的背景や暗殺当時の行動などを学んだ。特に、韓国や中国では英雄とされている様に驚いた。この日の夕食は各自自由とした。

〈4日目：2018年8月22日〉

この日はハルビン市中心部から東方に約180km 向かったところにある方正県方正鎮④を訪問した。朝8時15分にホテルを発ち、高速道路をひた走り10時51分に方正県方正鎮に到着した。ハルビン市が位置する地域は松花江が形成した松嫩平原に位置するが、

バスの車窓からそのスケールの大きさを感ずることができた。

方正県を含む旧満洲地域は、第二次世界大戦前に満蒙開拓団による入植と開拓が広く行われていた。日本の敗色が濃厚になった1945年8月9日、ソ連軍が「満洲国」へ侵攻すると、追われた日本人達は関東軍の食糧基地があった方正県を経由してハルビンに向かおうとした。逃避行の中で多くの日本人が命を落とし、婦女は現地の中国人と結婚し、乳幼児は引き取られ、残留婦女・残留孤児となった。このような経緯から、現在方正県は日本に帰国する中国残留邦人とその家族が最も多い県となった（山下ほか、2013）。

方正県では、旧満洲時代に犠牲になった日本人の遺骨を安置する中日友好園林を見学し（写真5）、日本人の援助で発展した水稲作の景観を観察した（写真6）。多くの地図帳などにおける中国東北部の農作物として、水稲作という印象はうすいことから、水田が卓越する景観は新鮮であった。また、方正鎮の中心部を散策し、地方都市の商店街や市場の様子について景観観察をおこなった。



写真5 中日友好園林

日中友好の証でもあるこの場所は、日中間の国際関係に緊張が走った2011年には、反日の活動家が慰霊碑に赤ペンキをかけるなどの事件も発生した。

（2018年8月、横山撮影）



写真6 方正県の水田と精米会社の看板

戦後、日本人の藤原長作氏によって、稲作技術が発展した方正県は、中国におけるブランド米の生産地である。

（2018年8月、横山撮影）

#### 〈5日目：2018年8月23日〉

この日は終日自由行動によるグループ調査日であった。学生達は、巡検コースに設定していなかった太陽島（松花江の中州であり、もともとはロシア人の別荘地に由来する総合公園）（写真7）やハルビン駅などを精力的に観察していた。



写真7 太陽島にあるロシア風テーマパーク

分岐した松花江に挟まれた広大な中州である太陽島は、現在は総合公園となっている。かつてはロシア人の別荘地として利用されていた。

（2018年8月、横山撮影）

〈6日目：2018年8月24日〉

早朝にホテルを出発してハルビン空港へ向かい、12時半に北京空港に到着した。ガイドと合流して昼食をとり、その後は休息を兼ね夕食まで自由行動とした。北京でのホテルは地下鉄2号線東四十条駅傍であり、東直街や三里屯などの繁華街に近く便利であった。夕食は四川料理であり、ハルビン市の東北地方とは若干異なる料理や味付けであった。その後は当初の予定にはなかったもののガイドの勧めで中国雑技団の演目を鑑賞することとなった。

〈7日目：2018年8月25日〉

この日は北京市内の巡検であった。朝8時にホテルを出発し、天安門広場⑤および紫禁城を見学した(写真8)。その後、北京の銀座と称される王府井⑥を散策した。午後は、明代以降の皇帝が祭祀を行っていた天壇公園⑦を見学し、15時頃北京大学⑧を訪問した。しかし、ちょうど9月より開催予定であった「中国・アフリカ協力フォーラム」の影響で、北京大学の構内に入っただけの見学はできず、大学にほど近い北京の秋葉原と称される中関村地区を車窓から見学した後、ホテルへと戻った。その後、夕食は各自自由とした。筆者らはホテルから近い、北京の原宿と称される三里屯を散策した(写真9)。



写真8 天安門広場に集う人の群れ

土曜日ということもあってか天安門広場はすごい人出であった。同行してくれたガイド曰く、多くは地方部から観光に来た人達であるとのことであった。

(2018年8月、横山撮影)



写真9 北京の原宿、三里屯の夕景

「北京の原宿」と称される三里屯は、高層の近代的な建物が立ち並ぶ。また、ユニクロなどのファストファッションの店舗も並び、きらびやかで多くの若者が集まるスポットである。

(2018年8月、横山撮影)

〈8日目：2018年8月26日〉

この日は終日自由行動によるグループ調査日であった。学生達は、オリンピック跡地や盧溝橋など中心部から離れた場所や前門(写真10)などの繁華街へも、地下鉄やバス、タクシーなどの諸交通機関を駆使して精力的に足を延ばしていた。

〈9日目：2018年8月27日〉

この日は朝8時にホテルを出て、頤和園⑨を見学した。頤和園は明代以降、皇帝の遊楽地として利用



写真10 北京の前門地区

前門地区は、天安門広場のすぐ南にあり、古くから続く商業集積地である。

(2018年8月、横山撮影)

され、清代には西太后の別荘として利用されてきたことで知られるが、そのスケールの大きさに圧倒された(写真11)。昼食後は万里の長城の観光拠点の一つ、「八達嶺」へ向かった。行列に並んでから約50分を要してロープウェーに乗ることができ、万里の長城の散策や見学を行った(写真12)。夕食は北京ダックを堪能した。

〈10日目：2018年8月28日〉

朝9時25分CA925で北京空港を発ち、予定通り14時頃に成田空港に到着した後、解散した。

#### IV まとめ

今回参加した学生達の多くは、海外渡航の経験は高校の修学旅行程度であり、10日間と長期にわたる今回の海外巡検の経験は新鮮であったようである。初日にややトラブルがあったことも影響したのか、ハルビン市に到着した後は少し疲れが見えていたような学生も、巡検が進むに連れて活き活きとしてきたように感じた。実際、夕食時の自由時間など短時間でも、地下鉄を乗り継いで様々な場所へ行ったり、食べたいものを食べに行ったりと精力的に動いている学生が多かった。学生のコメントからも「一人で地下鉄に乗って一人で北京駅に行ったこと、中国語が話せないなりに、一対一で小さいながらも現地の人とコミュニケーションをとったこと」を刺激的な出来事であったと振り返る意見があった。今回の巡検では、集団での巡検コースを盛り込みすぎないようにして、自由行動日を入れるとともに、極力夕食時を自由として、学生の自発的な行動を促すようにしたことが効果を発揮したようである。

また、今回の巡検では、グループでの自由行動調査を、それぞれの都市において1日ずつ設定したが、この調査では、型に嵌めたテーマや調査手法をとらせることをせず、極力様々な場所を「歩き」多くのものを「見て」、気が付いたことを「書く」というこ



写真11 北京の人々に愛される頤和園  
頤和園は、多くの北京市民でごった返していた。同行してくれたガイド曰く、北京市民は頤和園で休日を過ごすことが好きだという。

(2018年8月、横山撮影)



写真12 人で溢れかえる八達嶺長城  
八達嶺長城は、いくつかある万里の長城の観光拠点の中でも、長城までのアクセスが良いことから観光客に人気のスポットである。

(2018年8月、横山撮影)

とを徹底させた。そのためか、多くの学生は色々なことを見聞きして様々な感想を抱いたようである。そんな感想の一つとして、多くの学生に共通していた感想としては、中国に関する「イメージの刷新」であった。例えば、北京市の情報はテレビなどを通じて持っているものの、なかなか経済格差の大きな地方都市に関してのイメージは無い。今回の巡検ではハルビン市の郊外、方正県を訪問することで、中国における地方部の様子について観察を行い、ハル

ビン市や北京市と比較を行うことができた。また、その他に「ゴミ」や「汚い」などのイメージについての刷新が多く得られた。例えば、「一番感じたのは、日本で聞いた危ない、汚い、発展途上だ、という中国の印象は必ずしもその通りではないと感じた。鉄道や観光地は整備されてきれいであったし、頻繁に清掃されていたし、まるで日本が非常に優れて、中国は劣っているかのような目線で中国を見てはいけないのだと思った。」「中国は道にゴミが落ちていて、空気も汚いイメージを持っていた。しかし、街の至る所にゴミ箱が設置され、さらにゴミ箱は、景観維持のためにその地域にあったデザインになっていた。また、高圧洗浄機を使い毎日道路を磨いていた。そのため、中国にはイメージとは全く逆の綺麗な街があり、維持されていた。一方、大気の汚れは

イメージ通りであった。」などの意見があった。筆者も、2014年に山東省の青島市とその周辺地域を訪問した経験があるが、その時と比べて格段にきれいになり、また道路上のゴミ箱の数も多くなっているように感じた。

一部の学生の感想を紹介したが、今回の巡検において、学生達は現地での観察を通して、中国という国の発展や課題について理解を深めるとともに、中国に対する「イメージの刷新」を得ることができた。まさに、フィールドワークの醍醐味を味わったといえる。本巡検の学びを踏み台として、一人旅の海外旅行に出かけてみるなど個人の海外体験を深めてもらうきっかけになることを期待している。

(受付2019年2月5日)

(受理2019年3月5日)

#### 参考文献

内田順文・池田雄斗(2011):2010年度海外巡検(国際大学交流セミナー「中国遼寧省・河北省の都市と文化遺産」)に関する報告。国土館大学地理学報告, No19, 49-59.

兼子 純・呉羽正昭(2015):大学教育における海外巡検の実施とその効果。人文地理学研究, No35, 15-30.

山下清海・小木裕文・張 貴民・杜 国慶(2013):ハルビン市方正県の在日新華僑の僑郷としての発展。地理空間6-2, 95-120.

## An Academic Excursion in Harbin and Beijing, China

YOKOYAMA Takafumi\*・YAMASHITA Kiyomi\*

[Keywords] 1 Harbin 2 Beijing 3 Former Manchuria 4 China 5 Academic Excursion

\* Risho University